

1. ビール大麦「ミハルゴールド」の播種期別の播種量と施肥方法（情報）			
[要約]			
「ミハルゴールド」は、11月中旬播種では播種量を6kg以下とし穂肥を増施するのが蛋白質含量の適正化と収量安定に有効であるが、12月以降の播種では蛋白過剰を避けて収量を確保するために播種量を6kg以上とし、12月下旬播種の場合はさらに追肥と穂肥の増施を控える必要がある。			
研究室名	作物研究室	連絡先	086-955-0275

[背景・ねらい]

本県産ビール大麦は蛋白質含量の不適率（適正範囲 10～11%）が高く、その適正化が強く望まれている。また、播種適期である 11 月中旬の降雨や水稻の収穫遅れにより出芽不良や 12 月播きとなることも多く、収量や品質が不安定となっている。

そこで、新しく地域適応優良品種に採用された「ミハルゴールド」について、播種期に応じた高品質、安定栽培法を明らかにする。

[成果の概要・特徴]

1. 11月中旬の播種適期から 40 日遅れた場合でも、出穂期は 15～11 日、成熟期は 11～9 日の遅れに縮小した（図 1、2）。
2. 収量は播種期が 12 月 24 日以降になると低下した。蛋白質含量は播種期が遅いほど、また、播種量が少ないほど高く、12 月 4 日以降の 3 kg 播種では過剰となった（表 1）。
3. 11 月 14 日播種では播種量を 6 kg 以下とし穂肥を増施することにより、蛋白質含量が適正になるとともに良好な収量が得られた（表 1）。
4. 12 月 4 日播種では播種量を 6 kg にすることにより、12 月 24 日播種では播種量を 6 kg 以上とし中間追肥と穂肥を増施しないことにより、収量が増大するとともに蛋白質含量の過剰も防げた（表 1）。

以上の結果から、苗立の多少は収量・品質に大きく影響するので、12 月下旬までは圃場条件の好転を待って播種し苗立の安定確保を図るのがよく、播種期に応じた施肥を行うことで蛋白質含量の適正化と収量確保が可能となる。

[成果の活用面・留意点]

1. 県中南部のドリル播栽培に適用する。
2. 「ミハルゴールド」の蛋白質含量は「アサカゴールド」より 0.8% 高い（関連情報等）。
3. 播種量 3、6、13kg は、それぞれ苗立数 50、100、200 本/m²を目安としている。
4. 穂肥施用時期は幼穂長 10mm 期とする。なお、厚播きは茎が細く倒伏を招きやすいので、12 月でも播種量は 7～8 kg/10 a 以下とする。

[具体的データ]

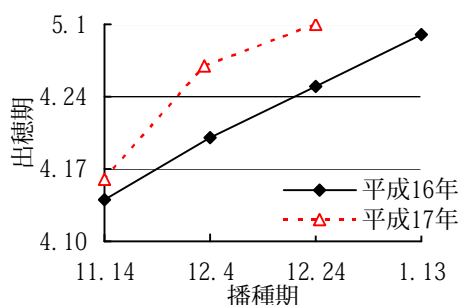


図1 播種時期と出穂期

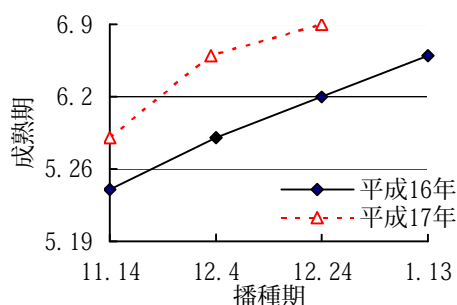


図2 播種時期と成熟期

表1 播種期、播種量、窒素追肥法と「ミハルゴールド」の収量及び蛋白質含量 (平成16、17年平均)

播種量	施肥法 ^z 中間-穂肥	11月14日播種		12月4日播種		12月24日播種		1月13日播種 ^y	
		収量 kg/10a	蛋白質 %	収量 kg/10a	蛋白質 %	収量 kg/10a	蛋白質 %	収量 kg/10a	蛋白質 %
3kg	2-2	428	9.7	377	10.9	358	11.0		
	2-3	444	10.1	416	11.4	347	11.4		
	4-2	442	10.0	408	11.6	384	11.4		
	4-3	464	10.5	465	11.6	380	11.6		
6kg	2-2	436	9.6	471	10.3	403	10.8	273	11.6
	2-3	428	10.0	488	10.6	416	10.9		
	4-2	427	9.6	532	10.9	475	11.2		
	4-3	450	10.1	480	11.0	436	11.1		
13kg	2-2	447	9.5	466	10.0	456	10.3	304	11.9
	2-3	407	9.5	490	10.1	414	11.2		
	4-2	441	9.4	499	9.9	499	10.5		
	4-3	480	9.7	536	10.2	451	11.1		
平均		441	9.8	469	10.7	418	11.0	289	11.7

^z 施肥法は中間追肥(2月4日 磷加安44号)と幼穂長10mm期穂肥(NK化成)の窒素施用量kg/10aで示す

別に基肥5kg(12月24日以降の播種は3kg 磷加安44号)施用

^y 1月13日播種は平成16年のみ実施

[その他]

試験研究課題・事業名：中国地域における麦類の高品質・安定多収栽培技術の確立

予算区分：受託

研究期間：平成15～17年度

関連情報等：平成14年度試験研究主要成果「二条大麦の地域適応優良品種『ミハルゴールド』(技術)」